

西澤八重と「鈴木という」男

— 家族史から1900年代初期の日系アメリカ移民を探る —

杉 野 俊 子

Nishizawa Yae and “a man named Suzuki”

— Exploring Japanese immigrants to north America in the early 1900s
through family history —

SUGINO Toshiko

キーワード：加州の日本人、社会主義活動、人種主義、移民労働者、エリート思想

1. はじめに

1885年東京麹町に生まれた西澤八重（後に吉川）は、15歳の時に内村鑑三が主催する聖書講談会に参加し、内村鑑三の数少ない女性の弟子として知られる。この聖書講談会で社会主義に目覚めた山内権次郎と結婚し、1905年に幸徳秋水などと共にサンフランシスコへ渡った。1907年に権次郎がチフスを患い若くして命を落とすと、幼子を抱えて日本へ帰国した。

一方、「鈴木という男」は本名を鈴木画一郎（雅号は無絃）と言い、1879年に現在の磐田市に生まれ、扇章汽船会社で10年余り勤務した後、1915年に移民として米大陸に渡った。渡米したものの、財を成すどころか事業の挫折で一時日本に帰国した。1924年に「驚き入る母国の社会」を出版した翌年になんとか渡航費を工面して画一郎は再度アメリカ西海岸へ戻っていった。

八重と鈴木の出会いは、桑港水平社を創立した岡繁樹が、日本の共通の知人に送った手紙の中で、「ところで、山内八重さんは二度目に鈴木という東洋汽船の事務次長か何かをやっていた男と結婚しウマクいかずわかれしました。その人との間に男子が1人あった。（中略）印刷した本が相当売れてそれからアメリカに来て居ました。あまりよい人物ではありません（以下略）」と書いている（NHK ファミリーヒストリー資料2017）。

八重や鈴木他に、多くの日本人が20世紀前半に様々な理由ではるばるアメリカに渡っている。困窮した生活から逃れるために渡米した移民労働者、政治的信条や宗教活動のため

に渡米した集団、公費留学したエリート集団、向学心に燃えて私費留学した若者達の間にはどのような違いがあったのだろうか。各集団はどのような相互関係を持っていたのだろうか。また、渡米理由の如何に関わらず、日本人という一つの括でアメリカ人種主義のあからさまな標的にされたのだろうか。そのような疑問に答えるために、本論ではまず西澤八重と「鈴木という男」の家族史から浮かび上がる様相を探り、次に当時の社会的背景などをみていく。

1.1 内村鑑三との出会い

西澤八重は1885（明治18）年5月23日に、東京麹町に誕生。実家は裕福で、祖父の常次郎は土地をドイツ公使館借用地として貸すほどの大地主であった。15歳の時に津田塾大の前身校に入学した。津田塾大の入学者名簿に記載されているが、卒業生名簿にはないため退学したと思われる。16歳の時に兄に連れられ内村鑑三主催の聖書講談会に参加（NHK 資料2017）。以下、講談会の八重の感想録である。

（東京麹町 西澤八重子 聖書の研究 第12号—明治34年8月25日）

私は七月廿五日から十日間^{つのはずむら}角筭村聖書の研究者の夏季講談会に出席しました。会場は角筭女学校の講堂で、勅語と加藤俊子先生のご肖像とが正面に掛けてありました。私は嘗て日々此の勅語と此の御肖像とに對して内村先生の教を受けました昔を思ひ出て、懐かしき考が起きました。中略 私が此会で得ましたすべての感じは神様と先生方の賜であると思ひ静かに感謝をいたします。 『聖書ノ研究』第12号 1901年8月25日より

同号の「講談会感想録」内村の付言

註、八重子嬢は余の恩人の一人なり。昨年余の女生徒が^{ことごと}悉く余を去りし時に嬢一人は余を信じ、余と進退を共にせられき、爾來嬢の^{しら}幸なき温貌が余の寂寞を慰めし事幾度ぞや、余は神が永く此天使を守り、彼女をして世の多くの悩める者を慰める者とならしめ給はらんことを祈る。

このように、当時唯一残った女性の弟子として、内村鑑三に大変可愛がられた様子がわかる。そのような八重が幸徳秋水と知り合いになったのは、聖書講談会で知り合った山内権次郎との出会いが大きい。

1.2 幸徳秋水との出会い、山内権次郎との結婚と渡米

1901（明治34）年に、幸徳秋水・安部磯雄・片山潜・河上清・西川光二郎の6人が日本で初めての社会主義の立場をとる社会民主党を結成した（川村1993：380）。無神論者・唯物論者の幸徳以外の5人はみなキリスト教の信者であった。1903年、日露戦争の気運の高まる中、同じく社会主義の堺利彦と共に、幸徳は自由・平等・博愛の三大理想（平民主義・社会主義・平和主義）を掲げて平民社の設立と週刊「平民新聞」の発行を始めた。平民社の

活動にはキリスト教の影響が大きく、各地の遊説や『平民新聞』や書籍販売には、その土地のキリスト教会やその信者の力によるところが大きかった（川村 1993：388）。

そんな中、八重は聖書講談会で山内権次郎と出会う。山内は社会主義に傾倒して幸徳らと親交を深め、八重と共に渡米計画に参加した。

当時、サンフランシスコは日本から追放された社会主義者や無政府論者の避難先となっていたため、日本政府は、海外から政治的脅威を与えかねないこれらの政治的反抗者の取り締まりを始めた。ちょうどその頃、東京の平民社を畳んだ幸徳の一行が1905（明治38）年にサンフランシスコに到着した。

十七日間、ただ雲と水だけの単調な船路にあきかたは私は、はじめて陸地をふんだときには、まるで蘇正の思いがしました。また、当地在留の同胞は、よろこんで私たちをむかえ、親切に諸種の便宜と助力とをあたえてくれますので、天涯漂泊の身であるのをわすれて、なんだか自分の故郷にでもかえったような感じがしました（伊藤 1970）。

東京における平民社は、解散した。いや、解散させられた。『直言』は、停止された。失意の客、敗軍の人として、ひとりションボリこの地にきたわたしが、たちまち宏壮な洋館の入口に、和英両様の金文字で、「平民社桑港支部」という看板がかかげられているのを見たときの愉快さは、いかばかりであったか。

（『光』第5号・明治39年1月20日）

その後、1906（明治39）年に幸徳達は社会革命党を結成した。その翌年の天皇誕生日に過激な扇動活動をしたとして、日本政府は在米日本人会の情報網を活用し、地元の日本人会指導者数名を内密の情報提供者として採用し日本人会を非公式の監視団体として利用した（東 2014：82）。彼らの言動を事細かに記録した当局・内務省警保局の資料が写真と共に残っている（鈴木茂三郎 1964）写真の一枚に、1906（明治39）年6月に撮影された社会革命党員15人（内2人はスパイとある）の写真がある。

その写真の中に、同年2月にOak Street 537で生まれた敏子を抱いている八重の姿もある。4月18日の桑港大地震や1907（明治40）年の夫・山内権次郎の病死により、14か月になる乳飲み子を連れて八重は同年米国から帰国した（NHK 資料 2017）。

2. 鈴木という男

前述の桑港平民社を創立した岡繁樹が、「印刷した本が相当売れてそれからアメリカに来て居ました。あまりよい人物ではありません（以下略）」と言及している人物は筆者の祖父の画一郎である。

画一郎は雅号を無絃、本名を画一郎といい（1878-1957）、両親は竜洋町で名主として小作人を雇って農業をしていた。1905年の日露戦争後に創立された扇章汽船に入社し、税関業

務の事務長として海上生活と陸上勤務をしていた。その間、欧米の諸港に立ち寄り 1915 年に個人的な理由でアメリカに渡った。1921（大正 10）年、43 歳の時に一度日本に帰国し、横浜に生活基盤をおいていたが、1923（大正 12）年 9 月の関東大震災により居住を郷里の浜松市に移した。震災を免れた原稿は、1923（大正 12）年に『驚き入つる母国の社会』として二松堂書店（印刷は浜松市）から出版された。翌年の 24（大正 13）年の再版本の中で震災と加州の排日運動に言及している。著書の中で、米大陸へ渡り、田園生活（農業）をなし、一時に富を造り羽振りのよい生活をしていたが、事業の挫折で元の木阿弥になり、在米 6 年間の苦心は一朝空に帰したと述懐している。

1925（大正 14）年に画一郎は再々渡航した。前年の 1924 年に米国の移民法に「帰化不能外国人入国禁止」の附帯条項が定められ、帰化権のない黄色人種の日本人移民は自動的に締め出されることになった、いわゆる「排日移民法」と呼ばれる法令で、その翌年に息子をおいて米国に戻ったのである。米国内の生活は明らかではないが、内職仕事をしながら文筆で生計を立てていたと推測される。その後、息子の健（けん）が上海居留民国立中部尋常小学校に赴任して 1935（昭和 10）年に画一郎を呼びよせ、終戦まで上海で過ごした。

夢破れてアメリカから日本に帰らざるを得なくなった画一郎のような移民であれ、新渡戸稲造のようなエリート集団であれ、当時アメリカにいた日本人は皆が人種差別と偏見の対象になった様相を以下見ていく。

3. 1905-1930 年頃の加州の日本人

3. 1 当時の日本社会と移民状況

八重たちが渡米した 1905（明治 38 年）頃の日本の社会は大きく変わりつつあった。当時の都市では社会主義とプロテスタント・キリスト教の新しい動きが見られるようになり、後者は特に東京・横浜・大阪・神戸などの都市における中産インテリ層や学生にも普及した（松下 1993）。

また、福澤諭吉などの知的指導者たちが「自由の聖地」としてアメリカを理想化したこともあり、直接外国に行って知識を学ぶ「洋行」「留学」は、青年たちの大きな夢となった（佐々木 1985：阪田 2002）。

一方、地方の農村・特に西日本地域では地租改正が原因で困窮化し、日清・日露戦争の帰還兵の失業や徴兵回避などが原因で、「故郷に錦をあげる」感覚で移民の数が急増した（オッペンハイム 2008：393）。

日本人移民は 1890（明治 23）-1900（明治 33）年にかけて 1 年あたり約 1000 人の割合でカリフォルニアに渡り、1898 年のハワイ諸島の併合に伴い、本土への日本人移民は 1900 年だけでも約 1.2 万人、総計で 10.3 万人を超えた（マックウィリアムス 1970）。

東（2014）によると、移民となった人々は、「窮乏した契約労働者」と「企業的労働者」

という二タイプに区分できると述べているが、その区分に当てはまらない人々も多かったようだ。たとえば、日本の伝統やしがらみに縛られた農村の暮らしに嫌気がさして新天地を求めて逆に夫や父親の移民をうながした女性達や、アメリカに憧れを抱いていたり、教育を受けたかったり、信仰の自由（キリスト教）を求めたりして渡米した人達である（Walz, 2012）。

また、「移民は経済的に困窮した最下層である」「貧農の二男、三男が日本で生活できないので、海外出稼ぎに赴いた」という従来の説に異議を唱える者もある（阪田 2002、飯野 2000）。なぜならば、アメリカへの移民は、船賃、旅券申請費用、見せ金、諸経費など高額のコストがかかり、移民予定の人々は土地を売るか親類や知人に借金してお金の調達をしなければならなかったからである（阪田 2002、飯野 2000）。1908-1924年に渡米した総数の30%は農場労働者・労働者・家事労働者、40%近くが専門職・ビジネスマン・熟練労働者、30%以上が自営農民だったというデータは、移民にはある程度の教育と財産の保証が必要だったことを物語っている（ダリティ & 南川 2006）。

画一郎の場合、明治時代の旧民法の家督相続のせいで親の全財産は長兄の七二郎に相続され、四男の画一郎は自分で稼ぐしかなかったようだ。幼い頃から海と英語に憧れて海外に行ってみたいという気持ちが強くなったが、その頃に海外に行くには政府派遣か開拓移民になるしかなかったので、現実的な道として汽船会社を選んだ。しかし、その汽船会社で、学閥や財閥や閥閥の関係で地位や順序が保たれないことに苦痛を感じ、移民として米国に渡る決心をしたとある（鈴木 1924）。

19世紀末、アメリカ西部は「新日本」、「第二の日本」、「新故郷」、「帝国の始まり」などと呼ばれ、知識層の移民や学生移民らの強い関心を集めた（東 2014：47）。1882（明治 14）-1890年に旅券発行の43.7%を占めた私費留学生で西海岸に居住した学生は、東海岸の有名大学へ留学できた裕福な日本人子弟とは異なり、ほとんどが家内労働などで滞在費・生活費・授業料などを稼がないといけな^い貧乏書生だった（阪田 2002：19、飯野 2000：20）。

彼らの多くは桑港の周辺で「スクールボーイ」という住込みの家内労働者として働きながら勉学を試みていた（山本 1986）。アメリカを「一時滞在の地」と考え、帰国後は立身出世をしてお国のために役立てたいと考えていたが、志半ばで挫折をして人生の進路を変更せざるを得ないものが多かった（山本 1986）。当初は、最初の邦人組織である「福音会」（1877年）を通して仕事を紹介されたが、需要が高まって日本人をよく知らないアメリカ人宅に行くことになる^{こと}になると各種問題が起きて解雇されることが頻繁になった（山本 1986）。1907年に実際に早稲田大学から南加州大学に留学した早田^{そうだ}が当時の体験を書き記している。

パークレーの太平洋神学校に在学中の早大校友で東京本郷教会教友の辻忠良史が新聞に公告してスクールボーイの仕事の口を取ってくれた。着米二週後想像もしない男性の下女奉公と云う羽目に陥った。然し運命だから何とも仕方がない。略。6時に起床。座敷の掃除、玄関の掃除、キッチンの掃き掃除、拭き掃除。病気の御主人の介護

補助、9時-12時まで授業。12時持参のサンドイッチで昼食。図書館で3時半まで勉強。4時に帰宅して、料理人が使用するエプロンをして、食事の準備。午後7時、公園のような広くて綺麗な道を通って町に出て、米人青年会の夜学校に行った。10時過ぎに家に帰る。(1-4、5-11 頁要約)

渡米以来七転八倒して、絶えず不幸な逆境に沈むどころか、実に社会の下層に厭迫されるもんだから、血涙を流して努力し奮闘し学校生活に移ってから、仕事を失えば勉強が出来ないから、必死となって働いた。中略。然し辛抱しなければ、学業を中止するの悲運に陥るのは知れ切って居る、6時に朝ごはんが間に合わない、すぐに追い出される、実に毎晩床に就いても心配でたまらない。(126 頁) (原文ママ)

結局、早田(1926)は次のスクールボーイの適職もなく、食費にも窮して挙句、結局体調を崩して本国に帰るのが最も得策だと判断して帰国に至ったようだ。

多くの日本人学生が当初の目標を変更せざるを得なかったのは、生活の困窮の他に「英語会話」に苦勞していたようで(山本 1986)、授業に追い付いていくのが困難だったせいもあると推測される。

3. 2 加州の日本人移民社会

アメリカで日系人が平和に暮らしていくためには、二つの面での同化が必要であった、一つは服装等の外面的同化と、二つ目はアメリカ社会の価値観の吸収などの内面的同化である(Ichikawa, 1974)。坂口(2002)は、シアトルの日本人移民社会を表す時、そのキーワードは定期船、県人会、日本語の三つであると述べている(38 頁)。県人会は、当初は単に県人相互の親睦と娯楽とを図るクラブ的団体だったが、排日気運が強まった日露戦争後 1907 年前後には太平洋沿岸各地の日本人移民社会で組織されるようになった(坂口 2002: 46)。そのため、県人会は経済的な困難や健康上の問題に直面した時の相互扶助の役割も持つようになった(坂口 2002)。その他の日本人共同体は、在米日本人会、在米日本人同業組合、仏教などの宗教組織だった。しかし、最大の影響力はキリスト教だった。日本人の多くはアメリカに行ってからキリスト教徒になったのは、信仰のこともさることながら、教会の集いが日系人の心の拠り所として大きな役割を果たしていたからだった(松下 1993: Walz, 2012)。

1910(明治 43)年 6 月のデイリングハム米国移民調査委員会会長の報告書によると、1909 年夏季期間に加州で農場に従事した数は約 30,000 人だった(松下 1993)。都市にも農村部にも日本人は人目につくほど固まって居住していた。固まって居住することと、どこでも目に付くという二つの要素は日本人に対する偏見を増大させ、そしてこの偏見は、廻り回って今度は日本人移民が以前よりいっそう集中して居住する度合いを増大させる結果となった(マックウィリアムス 1970: 118)。

3. 3 偏見から排日運動へ

反日扇動の理由付けの1つは、西部沿岸の日本人は『同化できない』という主張だった。たとえば、1900（明治33）年の加州の第一回反日大集会で、基調講演者のロス博士は日本人が好ましくない理由として、1. 日本人は同化することができなかった。2. 日本人は低賃金で働き、そのためにアメリカ人労働者の現行の労働基準を掘りくずした。3. 日本人の生活水準は、アメリカ人労働者の生活水準よりはるかに低かった。4. 日本人はアメリカ民主主義の制度にふさわしい政治的感覚を欠いていた、と主張した（マックウィリアムス 1970：32）。さらに、1905年2月23日から『サンフランシスコ・クロニカル』紙の猛烈な扇動記事が始まった。この記事の見出しには「「犯罪と貧困」アジア人の労働者が持ち込む」「公立学校のやっかい者、黄色人種」「米婦人の脅威—日本人」「白人の頭脳盗む黄色アジア人」などが踊り、その扇動者のリーダーは主に黄金期西部アメリカ生まれのアイランド「移民の息子たち」だった（マックウィリアムス 1970：33）。排日主義者達は日本人の子どもまで標的にした。加州の一議員が、日本人の子どもを「がに股のお化け、あわれな臆病者、サルに似た、墮落した、腐った小悪魔」と表現したのだ（マックウィリアムス 1970：131）。そこで一世たちは、日本語学校自体は明らかに失敗だったのだが、自分達の子どものプライドを植え付けるために維持していこうと学校存続を決意した（同上）。

ただし、加州の反東洋人指導者によって広く使われていた批判は「日本人とアメリカ人のあいだには人種的ななんらのつながりもない」のだからもともと「同化」など問題外だったともマックウィリアムスは指摘している（64頁）。東（2014）も『19世紀後半、日本人が大挙して太平洋を渡ったとき、アメリカ西部には中国人排斥法の結果として、白人支配階級とアジア出身者の安い労働力との間の確固とした人種的ヒエラルキーがすでに定着しており、アメリカ自体の西へ向けた膨張主義の中に日本人のその争いの勝算がないことは明白だった』と指摘している（48頁）。

日本人の出稼ぎ労働者はアメリカ社会に貢献していないという排日運動家の批判に応えるため、日本政府は「写真婚」の女性たちが移民すれば、日本人男性たちも落ち着いた家庭生活が持て社会に貢献できると考えて旅券を発効し続けた（ノムラ 2002：110）。しかし、日本人がアメリカに定着をし始めて子どもが増加すると、逆に排日運動家たちはそれを経済的な脅威と見なし始めたため、日本の外務省は1920年に写真花嫁に旅券を発効ことを止めた（ノムラ 2002：111）。それ以降、42%にもものぼる独身移民男性はお金をはたいて日本に帰り、結婚し、アメリカに妻を連れてこなければならなかった（ノムラ 2002：111）。画一郎も1921（大正10）年43歳で帰国した際、「耐して背後の画一郎は故山の風月に心身を養ひ、言語を一新して徐ろに再起を謀らんとし、妻女同伴再渡航の証明書を携えて、母国観光の名義で一時帰国した」と述べている。

同化とキリスト教の関係については、アメリカの精神基盤をなしているプロテスタントの信奉のもとで、自由と平等が保障されていて、アメリカンドリームは誰が望んでも良いはず

なのに、アメリカ社会は、日本人移民にとって排斥の主体に他ならなかった（吉田 1995：9）。彼らは宗教的にはアメリカ社会の根幹をなすグループに所属し、教会や教会内では目に見える差別は少なかったが、だからといって社会から何一つ優遇されなかったし、受け入れられもしなかったと吉田（1995）は分析している。従って、以前のプロテスタント伝道の指導原理はアメリカ社会への同化であったが、実際に伝道現場に携わっていたストージのような宣教師たちは、日本人をアメリカ化させることより、日本人のエスニシティ・連帯意識を強化保持させるようなエスニック教派協調団体や自給独立教会を形成させることに始終したようだ（吉田 1995：310）。

日本人排斥の中で、日本人教会は県人会と同様に日本人同士が生き残りをかけて連携と心の拠り所としていたと思われる。

しかし、マックウィリアムス（1970）は、『日本政府は（実は）西部沿岸の反東洋扇動を政治的に利用したと主張している。日本が利用したのは移民そのものではなく、反東洋扇動がいろいろな目的、つまり、日本のアジア侵略のかくれみの、反米的な日本の正論を形成する手段、増大の一途を辿る陸皆具の予算に対する口実、日本において国内政治を有利に導くための絶好の問題として利用し、アメリカとの取引の代償物、さらには日本国内に広がった社会的不満を排外的な路線に変えさせる手段として、利用できるということに気付いた』（21 頁）と述べている。また、東（2014）は、『しかし、農村出身の海外渡航者の大半は個人的理由から移住を考えたのであり、帝国臣民としての務めなどにはさほど関心がなかったという事実である。移民を利用した帝国膨張論というエリート思想は、大衆の個人主義を国家主義に包摂していたため、大半の一般移民の考えとは矛盾しており、そこに生じた不調和の種がのちのアメリカ西海岸の日本人の間で育つことになる。』（43 頁）と論じている。

1923 年に最高裁が下した、日本人は「米市民権不適格」という判決は、アメリカ社会に受け入れてもらいたいという一世の希望を捨てさせるものだった（マックウィリアムス 131）。最終的に、1924（大正 13）年に日本人の移民を全面的に禁止する「排日移民法」を通した。

3. 4 日本人の中の白人性と差別意識

作家で人種主義者のリー氏が、日本人に米市民権を与えないことによって、アメリカ人は、変則的な条件、つまり「共和国のなかにカースト制」をつくりあげたと日本人移民に対する政策的な欠陥を指摘したことにマックウィリアムス（1996）は言及している（64 頁）。それでは、日本人県民の中の相互関係はどうだったのだろうか。

前述の県人会は、県の誇りとアイデンティティという面で、一世が結束し安心感や一体感を育む上で大事な機能を果たしたが、それが分断を招くこともあった。それは、言うまでもなく他地域への固定観念だった（ハマモト 2014）。こういった固定観念は人間関係を壊す原因にもなったが、一番大きな問題は権力の差によるものだった。

出身県による暗い側面は、日本の身分制度に基づくアイデンティティだった。1800年代後半には身分制度は正式に廃止されたが、人々の間にはまだ階級制度のなごりが残っていた。(略)。絶対的な最下層とされていたのは“部落民(被差別民)”だった。しかし、彼らは米国に到着すると、自分達の身分や出自などほとんどの白人には分からないことに気付いた。日本では特権階級だった新渡戸稲造のようなエリートも差別や迫害の対象になった事を知った。桑港で日系人差別に対する直接的な抗議行動を行った一世の目的は、(略)、白人からの人種差別に対抗するための基盤を整えるだけでなく、差別への効果的な抵抗を通して、自分達を軽視している他の日本人移民に自らを証明することだった(ハマモト 2016)。

海外に出ることを奨励した福澤諭吉も、アメリカへの起業移住を行う人を中流階級出身の高等学者という狭い階級枠に限定しており、彼の説く移民論は士族出身者のみを対象とし、農村出身の庶民は眼中になかったようだ(東 2014: 45)。

また、日本人は自身の「白人性」を出すことで、アジアの民族との差別化を図った。東(2014)は、『カリフォルニアの排日論者と日本の移民批判者たちが用いた概念規定や言語に基づいて、一世文筆家は、歴史に手を加えることで自身の「白人性」(そして日本人性)を主張して、好ましい集団イメージを作り出そうと尽力した。多くの一世は自身の歴史的アイデンティティをアングロ・サクソン系アメリカ人の西部征服者の型に合わせ、一方で他のマイノリティ集団からは距離を置くような描写を行った。』(175-6頁)。

「黄禍」として二つの集団を一括りにするアメリカ人種主義の明確な態度があるにもかかわらず、根本的にエリート層の「日本人は文明的」であるとの自己イメージと、「中国人は非文明的」であると独自の東洋人差別観を抱き中国人移民を軽蔑しつつ、当然のことにように近代世界における友人とみなされていたアメリカの白人には敬意を示してもらえることを期待していた(東 2014: 69-70)。その一例として、早田(1926)も、「黒ん坊は今日でも米国社会の下層に厭迫され、絶えず憤慨し激怒して居る者も少なくないと、聞いている。日本人街の支那料理店に入って実に不潔で支那人になり損なった様な日本人の女中が給仕する(16頁)」と述べている。一世達は、いずれにしてもアメリカ社会ではアメリカ人種主義の明確な標的にされていたので、日本人移民集団内の差別は多少あったのだから、白人との関係からみれば一世達の階級の相違はさほど重要でなかったかもしれない。

4. 八重と画一郎の出会い

それでは画一郎と八重はどのように出会ったのだろうか。父親・健^{ケン}の記憶をまとめた資料(鈴木健 1972)には、自分の出生について次のように書いている。

(健が9歳の時)“アメリカの叔父さん”が日本に帰って来るという知らせがあった。ある晩、母(長兄七二郎の妻たよ)は健を呼んだ。「アメリカの叔父さんはあなたの本当

のお父さんです。」と言った。健はぎくっとしながら母の顔をみつめた。太平洋航路に務めていた画一郎はアメリカで未亡人になり困っている「女」を助けて連れて帰った。二人は間もなく結ばれ、健を生んだ。籍がないのを心配した母（たよ）は健を自分の子として入籍した。暫く横浜で同棲していた「女」は、画一郎の烈しい性格に居たたまられず、幼児を置いて出て行った。間もなく画一郎もアメリカに移住してしまった。「そんな事で、お前は三つの時から私の子として大きくなったが、アメリカの叔父さんが帰って来るので、今はっきり話しておきますよ。お母さんはね、お前を本当の子だと思っていますよ」（鈴木健 1972）

この中に「画一郎はアメリカで未亡人になり困っている女を助けて連れて帰った。二人は間もなく結ばれ、健を生んだ」となっている。この助けた女性が「八重」である可能性が高い。画一郎の著書（1923）にも以下の下りがある。

「^{ふなよい}船暈の女」こんな時にお母様が側に居て下さったならば……と三等婦人室の一隅に寝て居て四五日來の船暈に悩んだ私は、思ひは遠く故郷の慈母の許に通ひ、悲哀の上に迫り泣かんばかりであったが、あはれ今は千里波の上、誰とて此の身の為に暖かい同情を寄する者もなく、あたり皆寂寞荒涼、宛ら死の国へ往ったような心地がして、（略）、何とも云い難い苦痛を感じました。

かかる苦痛の檻に唯だ一つ救いの道は睡眠にあることと思ひ、胸にわだかまる雑念を去って静かに眼を閉じれば、さらに悲哀の諸情を呼び起こし、どうしても美しい夢を結ばれない。（略）〔三等船室の方が大勢一緒に寝起きし、婦人船員の監督がいて安全であると聞いて、自ら好んで三等船客となったが、實際船暈の苦痛には我慢が出来なかったため一等室に移り快適に過ごした〕。今度の帰りに二等室へ乗ったが、少しも船暈を感じず、食事は陸上よりも多く食べ、航海中時々活動写真などの余興があつて、大変面白くありました。これは第一私が永く海外に居て体力が強くなったからでしょう。最初渡米した時は思想のみ高く、どんな苦痛にも打ち勝って必ず成功を遂げ、海国婦人の使命を果たさんと決心していましたが、精神的にもまた肉体的にも苦痛に打ち勝つという事は容易でない事を経験しました。何れにしても苦痛と戦わんとするには、修養を積み心身共に健全であらねばならぬこととあります云々と、新婦朝（帰国）の一レディーは（自分を訪ねて来て）、渡航中の所感を形容沢山で面白く物語った。自分は長時間無言で聞いていたが、味わえば可なり興味の深い言葉であると思った。（驚き入つる母国の社会、1923、285-288）

この一レディーが八重であるかどうかは確定的ではないが、健の記憶や前後の状況から判断するとその可能性は高い。

NHK の資料（2017）によると、八重は1907年に帰国後しばらく横浜の山内権次郎の実家に身をよせていたとあるので、すぐに画一郎と一緒に住みだしたとは考えにくい。

健の実母のその後については画一郎も健も何も言及していない。昭和31年頃、「（その女

性は）有名な学者の奥様になっている。」と健の二男の善勝が聞き、実母は出稼ぎ労働者ではなかったと推測している。

また、一枚の写真が横浜での生活を想像させる。これはその善勝が昭和 58 年に、カリフォルニア・ファーストバンク日米歴史資料室の故岡省三氏の尽力で偶然見つけたもので、書斎で画一郎が和装姿で正座をし、幼少の健は当時（大正 3 年頃）にはめずらしく髪を分け背広を着ている。この写真を撮った頃にはすでに「その女性」は出ていってしまい、その後も画一郎と健は二人で住んでいた可能性がある。

また、岡氏が探して出したハガキには、画一郎がサンフランシスの 1624 Post Street の Mrs. N. Matsumura に書いた礼状（1934 年頃）が残っている。文面は、日本のプロテスタント系新宗教の指導者である「松村 介石先生〇〇の際にお目にかかり本当に喜ばしく存じました」という礼状であった。その住所はサンフランシスコの Japan Town 内で、平民社（680 Hayes St.）や八重が敏子を出産したアパート（537 Oak St.）の付近でもある。

八重と鈴木を結びつける一番の決め手になったものは、前述の岡繁樹が 1956 年 12 月 14 日付け（当時 78 歳）に社会主義者の堺利彦の身内に宛てた手紙であろう（NHK 資料、2017）。差し出し先は、Mrs. Matsumura 宅に近い 1575 Post Street である。

7 月 19 日付け。お手紙頂戴いたしました。ご身体をご大事に... 長生きしてください。あなたは日本における社会民主運動の生きた歴史です。中略。山内八重さんは二度目に鈴木という云う東洋汽船の事務長か何かをやっていた男と結婚しウマクいかずわかれしました。その人との間に男子が一人あった。それが上海の東亜同文書院を出て支那で何か就職していて、その父の鈴木君は東京大震災後にすぐに沼津市の印刷所で印刷して東洋汽船の船・土の内幕を書いた本を出し、それが相当売れてそれからアメリカに来て居ました。あまりよい人物ではありません。その後の消息は知れていません。それから八重さんは幼馴染の吉川一水さんと云う帝大の法科出の東洋汽船桑港支店主任などしていた人が奥さんが亡くなり八重さんと結婚してお子さんも沢山あるとか聞いています。

名称の細かい点、例えば東洋汽船は扇章汽船、沼津市は浜松市、上海の東亜同文書院ではなく浜松師範専攻科卒や、本が相当売れたのではなく長兄から田地田畑を売って金を無理やり工面させたのが再渡米の資金になった、という点などの情報が一致しないが、その他の情報は奇妙に一致する。岡氏は、画一郎のことをあまり知らないようだが、あまり良い人物ではありません、鈴木君と呼んでいるところから、ある時点でなんらかの接触があったと思われるので、八重の 2 人目の主人は鈴木画一郎であり、健が 2 人の子ともという確率は高い。

5. おわりに

長年「海外発展こそ国のため」という理念を持っていた鈴木画一郎という「ある男」「日本人男子」「鈴木という男」は、海外と英語に対する憧れを汽船会社勤務とアメリカ移民と

いう形で実現させた。結局、渡航した際の年齢も高く、地方の出身でも県人会に属する程ではなく、キリスト教徒でもエリート出身でもなく、かといって労働に汗する移民にもなれなかった画一郎は、帰属グループもなくアメリカでどのように暮らしていたのだろうか。家族の中の画一郎は、英語や漢文の勉強に励み、自分の意見に固執し、女性を敬うことを説きながら日本男子はという封建主義でエキセントリックな男だった。夢破れて帰国したものの最後までアメリカに憧れを残し、アメリカ式を貫こうとした。最後は家族と一緒に住み、「孫たちよ！海外に雄飛せよ」という言葉を残して人生を終えた。

一方、八重は東京の麹町生まれで、内村鑑三や幸徳秋水など著名人との交友があり、サンフランシスコで社会主義運動などに加わったが、最後は夫の吉川一水と共にキリスト教徒として清貧な生活を送り、子宝にも恵まれて穏やかな晩年を迎えることが出来た。今回、NHKのファミリーヒストリーという番組のお蔭で健^{けん}の誕生後105年ぶりにその存在と関係が明らかになった八重と画一郎。彼らの子どもの健は、教員として上海に渡り結婚後6人の子宝に恵まれ戦後日本に引揚げてきてから浜松市役所に勤めて人生を終えた。

ハワイ移民から約150年が経つ。しかし、アメリカ移民、日系アメリカ人の研究は未だつきることがない。それは歴史、宗教、政治、言語、文化面など専門が多面的に分かれていることもあるが、一人一人の人生史の魅力とロマンがあるから研究は尽きることがないのではないかと思う。本論は、日本人移民労働者、渡米した知的指導者たち、日本人排斥、白人性、アメリカ人種主義、白人と同等視するエリート思想などに焦点を当てると同時に、女優「大竹しのぶ」の祖母である西澤八重と筆者の祖父である鈴木画一郎の双方の家族史から浮かび上がる様相を探ってみた。2017年10月末時点の外国人労働者数が127万8670人となり、事実上「移民国家」に足を踏み入れているわが国の将来にとって、彼らを「出稼ぎ労働者」として一括りで捉えるのではなく、画一郎と八重のように、彼ら一人一人が個人史の主人公であり、そこにロマンがあることも忘れないよう彼らに接するべきであることを最後に示唆したい。

注

本論文は、2018年6月2日（北九州大学）第52回アメリカ学会年次大会の口頭発表原稿「吉川（西澤）八重と「鈴木という」男一家族史から1900年代初期の日系アメリカ移民を探る」を訂正・加筆したものである。

謝 辞

100年もの年月を経て偶然にも祖母が見つかるというきっかけを作ってくださったNHKファミリーヒストリー番組製作担当の金本麻理子氏（椿プロ）と、貴重な資料を提供して下さった吉川八重さんの孫にあたる吉川圭介氏に感謝の意を表したい。また、工学院大学図書館と研究論叢編集委員の皆様に、本稿を始め、論文3点を掲載する機会を与えてくださり謹

んでお礼を申し上げたい。それらは、「アメリカで Jap (anese) として生きる事—太平洋の向こう側に夢を求めた日本人男子のモノグラフから」(工学院大学研究論叢、第 49 号／2、1-16 頁、2012 年 2 月)、「アメリカから上海の日本人租界へ—家族史の中の祖父画一郎—」(第 53 号／1、1-17 頁、2015 年 10 月)、「家族史の中の祖父が見つけた終の棲家—引揚者として上海から浜松へ—」(第 53 号／2、1-16 頁、2016 年 3 月)である。最後に、本稿を 2017 年 8 月に亡くなった長兄の鈴木達徳(享年 79 歳)に捧げたい。

参考文献

- Ichikawa, Y. (Ed.). (1974). *A buried past: An annotated bibliography of the Japanese American research project collection, 1st Ed.*, Berkeley: Univ. of California Press.
- Waltz, E. (2012). *Nikkei in the interior west: Japanese immigration and community building, 1882-1945*. Tucson, Arizona: The University of Arizona Press.
- Dairy, William Jr, 南川文里 共著 (2006)「水平的移動・人種・アメリカ化：移民をめぐるマスターナラティヴ批判」樋口映美・中條献編『歴史のなかの「アメリカ」：国民化をめぐる語りと創造』349-368、彩流社
- 東栄一郎 (2014)「日系アメリカ移民・二つの帝国のはざままで」飯野正子監訳、明石書店
- 飯野正子 (2000)『もう一つの日米関係史』有斐社
- 伊藤 整 (責任編集) (1970)「平民主義 幸徳秋水」『日本の名著 44』中央公論社
- NHK 資料 (2017) NHK ファミリーヒストリー「大竹しのぶ編」用の NHK 資料
- オープンハイム・ジョアンヌ (2008)『親愛なるブリード様：強制収容された日系二世とアメリカ人図書館司書の物語』今村亮訳、柏書房
- 川村善二郎 (1993)「初期社会主義における平和の思想と運動」『日本平和論体系 2 幸徳秋水、安部磯雄 週間平民新聞(抄)』日本図書センター
- 坂口安雄 (2002)「ネットワークでつながる日本人移民社会」、ベフ・ハルミ編者、37-68『日系アメリカ人の歩みと現在』人文書院
- 阪田安雄 (2002)「太平洋を跨ぐ北アメリカへの移住一定住をめざす逆境での苦闘—」ベフ・ハルミ編者、15-36『日系アメリカ人の歩みと現在』人文書院
- 佐々木篁(ささきたかむら) (1985) 岩手放送編『アメリカの新渡戸稲造』、盛岡市：熊谷印刷出版部、1985 年) 16
- 鈴木健 (1972)『流れの中に』未発表著書。筆者の父親の鈴木健が 1972 年に文芸春秋社に投稿したが不採用になった。手書きの原稿を、後に二男の鈴木善勝がワードにしたために、ページ数は不明。
- 鈴木茂三郎 (1964)『在米社会主義者・無政府主義者沿革』社会文庫編・編者、柏書房
- 鈴木無絃(画一郎) (1923)『驚き入る母国の社会』二松堂書店(印刷は浜松市、全 333 頁)
- 早田耕捌 (1926)『北米の移民生活』警醒者書店
- ノムラ、ゲイル (2002)「日系アメリカ女性の歩み」ベフ・ハルミ編者、97 - 130『日系アメリカ人の歩みと現在』人文書院
- ハマモト、ベン (2016)「日本から米国に移動したアイデンティティの考察」長 里子(訳)『Nikkei Heritage』(2015 年秋号—2016 年冬号、Vol. 26、No. 1)に掲載された記事の翻訳。Retrieved on 2018/05/04 from <http://www.discovernikkei.org/ja/journal/2016/10/26/emigration-of-identity/>
- マックウィリアムス、ケアリー (1970)『アメリカの人種の偏見—日系米人の悲劇』鈴木二郎・小野瀬嘉慈(訳)、新泉社
- 松下士朗 (1993)『カリフォルニア日系知識人の光と影』明石書店
- 山本英政 (1986)「初期日本人渡米史における学生家内労働者」『英学史研究 第 19 号』141-156、日本英学史学会
- 吉田亮 (1995)『アメリカ日本人移民とキリスト教社会—カリフォルニア日本人移民の排斥・同化と E. A. ストージー』日本図書センター

西澤八重と鈴木画一郎の年表

年代	八重	年代	画一郎
1885 (明治18)	東京麹町に5月23日誕生	1878 (明治11)	3月3日、磐田郡竜洋町に誕生
1900 (明治33) 15歳	独立女学校 (津田塾大の前身)		
1901 (明治34) 16歳	内村鑑三の聖書講談会に出席		東京法学校 (現法政大学) に通学か
1905 (明治38) 20歳	幸徳らと11月29日加州に到着 山内権次郎と結婚	1905 (明治38) 27歳	扇章汽船に入社
1906 (明治39) 21歳	6月、社会革命党結成式の参加、山内はメキシコへ日本移民監督、娘敏子を出産		
1907 (明治40) 22歳	1月山内が死去、3月3日アメリカ丸で帰国、横浜に居住		
1907-1912	この間のどこかで知り合い、横浜に居住していた可能性大		
1912 (大正1) 27歳	3月22日 ^{けん} 健誕生	1912 (大正1) 34歳	3月22日 ^{けん} 長男健誕生。伯父夫婦の実子として入籍
			健が3歳まで横浜に在住
1915 (大正4) 30歳	東洋汽船桑港支店長の吉川一水氏と結婚 (一水1910年渡米)	1915 (大正4) 37歳	1914年に扇章汽船退社 (再度) 米国へ渡米
1916 (大正5)	一水仙台の女学校に赴任	1921 (大正10) 43歳	米国から帰国
		1923 (大正12)	初版出版、関東大震災
1924 (大正13) 39歳	仙台より東京へ転居	1924 (大正13)	再版出版
		1925 (大正14) 47歳	(再々度) 渡米、詳細不明
		1935 (昭和10) 57歳	健、上海の尋常小学校へ赴任、上海へ合流
		1946 (昭和21) 68歳	上海から一家で引揚げる
1952 (昭和27)	3月12日死去 享年67歳		
		1957 (昭和32)	死去 享年79歳

(すぎの としこ 教育推進機構非常勤講師)